〔研究ノート〕

画僧　松花堂昭乗

松花堂昭乗は真言密教を修し、阿闍梨の位にまで至った石清水八幡神社の社僧です。桃山時代の終りから江戸時代の初期にかけて文化的な指導者として大きな役割を果たしました。とりわけ能筆として知られ、近衛信尋、本阿弥光悦とともに寛永の三筆と並び称されています。また、松の新芽に微かに花開く松花にちなむ堂号を持つことからも分かるように、風雅を愛し、和歌や連歌を嗜むかたわら、茶湯にも深い造詣がありました。松花堂の蒐集した茶道具は、今日、八幡名物と呼ばれています。

このように、書家として、あるいは茶人としての松花堂昭乗の他に、今日では専門絵師たちの蔭に隠れている観がありますが、画僧としての活躍も看過できません。近衛家文書には、禁中から依頼された職人づくし絵を制作するにあたり、紙の大きさから、図様の構成まで詳細に問い合わせる書状が残されていますし、鹿苑寺の住持であった鳳林承章の日記、『隔蓂記』の寛永十五年六月四日の条には、北条氏重に望まれた三幅対の絵を持参する記載があります。さらに、『高野山文書』（金剛三昧院文書）には、金剛三昧院の僧、良運房の訪問を受け、屏風の押物として絵に仮名を書き添えたものを六枚、おそらくは、仮名に対して漢字を指すのでしょうが、文字のみを書いたものを六枚渡したことを記す書状の写しが収録されています。この他にも、昭乗の画事を示す文献資料は多く、水墨画から大和絵系の作品まで幅広く制作していたことが分かります。興味深いものでは、『本阿弥行状記』（第83話）に、昭乗が光悦の新築した小室を訪れた折、荒壁の滲みから浮かび上がる山水鳥獣の絵姿を写したという逸話が見られます。

昭乗は寛永十六年九月十六日、五十六才の生涯を終えますが、林羅山の『羅山詩集』や石川丈山の『覆醬集』に収められた追悼詩では、「写生入木天下無双」、「声価争伝水墨画」と詠われており、昭乗の絵画作品が非常に高い評価を得ていたことが知られます。『松花堂上人行状記』では、「書画ハ牧渓和尚の風を仰希せられけり」、「絵は和尚梁楷にもかきをくれし」と述べられていますが、牧渓、梁楷という画人は、ともに室町時代以来、日本で最高の評価を与えられてきた中国の南宋時代の画家であり、この両者に比肩されることは、当時としては最大級の賛辞と考えてよいでしょう。特に、牧渓が僧侶であったことから、ことさら昭乗と関係づけられたのかも知れません。この書は佐川田昌俊が昭乗の業績を書き留めたもので、昭乗と同時代に生きた人物の記録として、松花堂研究の基本資料となっています。この他にも、画事に関する記載が散見され、昭乗が自画像、僧形八幡像、真言八祖像を制作したという貴重な記載もあります。

ここで、注目されるのは、真言宗の社僧としては当然のこととも言えますが、絵師としての専門的な素養を必要とする僧形八幡像、真言八祖像などの仏画を描いていたことです。単なる素人画家ではなく、絵画においても本格的な技量を備えていたことが分かります。真言八祖像は所在が確認されていませんが、僧形八幡像は旧国宝に指定され、石清水八幡宮に伝えられていました。しかしながら、この作品も昭和二十二年の火災で惜しくも焼失し、現在では、残された写真でしか見ることができません。謹厳な筆致で実に丁寧に描かれた着彩画で、「欽奉画松花堂昭乗」という落款があります。なお、この作品を収める漆箱の蓋表には、「石清水八幡宮御神影雄徳山一山什物奉寄松花堂」、その蓋裏には「寛永十六年巳卯三月吉日一山什物松花堂造之」の銘記があったと報告されています。『松花堂上人行状記』によりますと、この年の三月二十三日は師の実乗の十三回忌にあたり、曼荼羅供をともなう追福の修善奉行の大法事を行なったことが分かります。おそらく、この作品も真言八祖像とともに大法事に応じて制作されたものでしょう。この年の九月に昭乗は世を去りますので、画家としても再晩年の大仕事といえます。

昭乗は他にも、十六羅漢図をはじめ仏画に類する作品を描いています。野村美術館に所蔵される維摩寒山拾得図三幅対では、中幅の維摩図に「比丘昭乗焼香拝図」と落款が記されていますので、この作品も何かの仏事に応じて制作された作品と思われます。興味深いことに、この作品の拾得図は、MOA美術館に所蔵される伝梁楷筆寒山拾得図を明らかに踏襲しており、先ほどの『松花堂上人行状記』の「絵は和尚梁楷にもかきをくれし」という記載を想い出させます。しかしながら、梁楷作品の鋭い気迫に満ちた皴法は、松花堂作品には見られず、常人を超えた薄気味悪さを漂わせる笑顔も、人の心を和ませるような無邪気な表情に変わっています。これは、やはり日本特有の美意識の一端が示されていると言えるでしょう。この時代の絵師にとって、東山名物に代表される前時代の美意識から、いかに自分たちの進むべき道を見出すかが大きな課題となりました。松花堂昭乗の八幡名物に代表される美意識がいかにして生まれてきたかを考えさせてくれる作品です。

（中部義隆）

拾得図（部分）　野村美術館蔵

寒山拾得図（部分）　MOA美術館蔵

僧形八幡像（昭和22年焼失）

維摩図　野村美術館蔵

季刊 美のたより №103
平成5年5月20日
発行　大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.